



イグナチオ・ロヨラと聖杯騎士伝説：イエズス会創設と海外展開をめぐる人文地理学的アプローチ

川西, 孝男

(Citation)

人文地理学会2014年大会

(Issue Date)

2014-11-09

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(Rights)

ここに掲載した著作物の利用に関する注意: 著作物の著作権は人文地理学会に帰属します。本著作物は著作権者である人文地理学会の許可のもとに掲載するものです。ご利用に当たっては”著作権法”に従うことをお願いいたします。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002646>



—イエズス会創設と海外展開をめぐる人文地理学的アプローチ—

Ignacio de Loyola and Legend of Holy Grail's Knight
—Human Geographic Approaches towards his foundation and
advance to overseas of the Society of Jesus(IHS)—

川西孝男（ドイツ・オーバーフランケン歴史協会員，国際日本文化研究センター特別
共同利用研究員，関西学院大学・院生）

KAWANISHI Takao (Historischer Verein für Oberfranken e. V. in Deutschland, Special
Inter-Institutional Research Fellow, International Research Center for Japanese Studies
(NICHIBUNKEN), Doctoral Course of Kwansai-Gakuin University)

キーワード：イグナチオ・ロヨラ，イエズス会，聖杯騎士伝説，対抗宗教改革，ローマ教皇庁，モンセラート，エルサレム，パリ大学，フランシスコ・ザビエル，日本（ジパング），天正遣欧少年使節

Keywords: Ignacio de Loyola, Society of Jesus(IHS), Legend of Holy Grail's Knight, Counter-Reformation, Roman Curia, Montserrat, Jerusalem, Université de Paris, Francisco de Xavier, Japan(Zipangu), Tenshō embassy

1. “神の騎士” イエズス会創設者ロヨラをめぐる人文地理学的アプローチ

16 世紀における対抗宗教改革の先鋒を担ったイエズス会（1534）を創設し、カトリックを再興した「神の騎士」イグナチオ・ロヨラ（1491-1556、**図1**）は、イエズス会士を日本に派遣するなど、キリスト教を世界に布教した人物としても知られる。ローマ・カトリックの守護者としてのロヨラに関する研究はすでに完成の域に達しているかにみえる。しかしながら、「神に導かれた」という神学的形容に包まれたロヨラの生涯が学術的アプローチやリアリズムの視点から遠ざけられている感も否めず、当時のカトリックがいかに再興されたかといった核心部分が問われてはいなかった。私は、ロヨラがその生涯の中で得た精神性こそがイエズス会そしてカトリック改革に大きな影響を与えており、これがキリスト教義にはない聖杯騎士伝説の中にあつたとみている。この伝説はロヨラの歩んだ道程やイエズス会の布教ルートにも影響を及ぼしている上、彼の右腕であったフランシスコ・ザビエル（1506-1552）と信仰以外にも多くの共通点を有している。



図1 ロヨラ像（スペイン・ロヨラ城教会、筆者撮影）

本論では、人文地理学のアプローチを用いて、イエズス会の精神に、正統や異端をも包括し、異文化や他宗教との共存の可能性をも示した聖杯騎士伝説による影響があつたことを例証する。この伝説の視点を通じてロヨラやザビエルらイエズス会士が世界の果ての理想郷「ジパング」に求めたものを、その精神的交流の完成の場面であつた天正期の遣欧使節のローマ教皇謁見とともに考察したい。

2. 聖杯騎士伝説のロヨラへの影響

中世ヨーロッパには、英国の「アーサー王伝説」、フランスの「ペルスヴァル、あるいは聖杯の物語」、神聖ローマ帝国（ドイツ）の「パルツィヴァール」といった聖杯騎士に関する伝承があり、それは12世紀ころまでに欧州の内外に流布された。この伝説は神聖ローマ帝国シュタウフェン朝下で支持を得て、カトリック改革を目指す新理念とされたが、カトリック支持勢力に敗れたシュタウフェン朝の断絶によって、13世紀半ばにはヨーロッパ内においてカトリック旧体制が復活したという歴史的経緯を持つ。

ロヨラは少年時代、スペイン・バスク地方の貴族（騎士）として父の城の中で過ごし、カトリック信仰とともに聖杯騎士伝説の世界に憧れ、恋愛そして騎士としての武勲を夢見ており、ロヨラは当初、信仰よりも世俗的な成功を求めていたことが自伝から窺える。しかし、フランス軍の侵攻にともなうパンプローナでの籠城戦で足に重傷を負い、死線をさまようことになる。（**図2**）



図2 瀕死のロヨラ像（ロヨラ城、同）

ロヨラの自伝は、この闘病期にキリストの伝記や聖人伝たる「黄金伝説」との出会いが信仰に向かわせたとするが、むしろ後遺症の残る体となって人生に絶望し、神に救済を求めるストーリーを持つ聖杯騎士伝説こそが、彼の内面を支え得たものと解釈できる。この伝説の影響はロヨラの足跡を追うことでさらに明らかとなる。闘病生活を終えた後、ロヨラは聖杯騎士伝説のメッカというべきスペインの霊山モンセラートを訪れ、キリスト教義にはない「黒いマリア像」に祈りを捧げ、武具を捨て、世俗の騎士から「神の騎士」として生きることを誓ったが、これも聖杯騎士としての誓いを立てたことを暗示している。

さらに、ロヨラはこの後もローマに向かうことはなかつ

た。モンセラートに近いマンレザの洞窟に籠り、1年にわたる瞑想を取り入れた独自の「霊操」によって修行を行う中、近くの川辺で人生最大の覚醒を経験する。このような教会以外の場での自己流の修練による覚醒はカトリック的ではなく、むしろ、聖杯騎士伝説や神秘主義、あるいはプロテスタンティズムに通じるものである。(図3)



図3 マンレザからのモンセラート遠景(同)

この後にローマ入りを果たし、教皇に拝謁したが、わずか10日前後の滞在の後、エルサレムに向かっていく。聖墳墓教会などを訪れたロヨラは、この地へ訪れる巡礼者の保護のために生涯を捧げようとしていた。中東情勢が極度に悪化したため、その願いは叶わなかったが、「バルツィヴァール」といった聖杯騎士伝説もエルサレムをその中心舞台として十字軍時代と密接に関連しており、ロヨラもまたエルサレム巡礼者を保護した十字軍騎士のように聖杯騎士伝説の世界に生きていたと言える。

3. イエズス会と聖杯騎士伝説

エルサレム滞在後、ロヨラが次に目指した地はローマ教皇庁への帰還ではなく、母国スペインの大学での学究であり、その後、国際的な大学都市パリに向かった。彼はエラスムス(1466-1536)やカルヴァン(1509-1564)を輩出したパリ大学でカトリック神学に関する批判そしてプロテスタンティズムへの時代のうねりを体験する一方、「霊操」にみられる神秘主義思想への探求・実践を行った。ここにもロヨラが独自の神学論を追及していたことが分かる。

パリ大学での勉学と信仰生活が、やがてザビエルとの出会いをもたらし、隣国ナバラ出身の彼もロヨラと同じく城主(騎士)の息子であった。イエズス会創設時の主要メンバーが教会関係者ではなく騎士階級(貴族)に属し、しかもローマ教皇庁ではなく、大学都市パリというアカデミズムの中に集結したことは注目に値する。

このようにイエズス会は当時改革の精神溢れるパリの地で結党され、やがてヴェネツィアに移り、エルサレムでの巡礼支援活動や海外での布教の機会を待っていた。その姿はカトリックの守護者というより、むしろ、ヨーロッパ以外の地に自ら理想郷を求めて旅を志す探検者そして開拓者としてのイエズス会士像を想起させる。これもまた、「バルツィヴァール」に描かれた聖杯騎士たちによる、世界規模での聖杯の探索に影響付けられよう。

4. 日本とイエズス会との出会い—聖杯騎士としての天正遣欧少年使節—

当時のローマ教皇庁は宗教改革の波に揉まれ、自らの改革を迫られていた。「神の騎士」として軍律に等しい厳しい戒律をもって海外に布教せんとするロヨラ以下イエズス会士達は、カトリックの将来あるいは存亡を担っていた。

海外での活動が注目されるイエズス会であるが、ロヨラはローマに残り、イエズス会の大学(Collegio Romano, 1551-)、現教皇庁立グレゴリアン大学、(図4)を設置することを願い出ており、ロヨラの精神に学ぶ宣教師たちが世界に羽ばたいた。ここにも正統神学のみならず、自然科学

や人文社会科学をも修得し、総合的かつ全人的な教育を重視するロヨラの姿勢が明確に示されていた。



図4 ローマ教皇庁立グレゴリアン大学(同)

一方、教皇庁ではカトリック内部の改革が続けられたが、カトリックの行く末に憂慮するローマ教皇そしてロヨラは、ローマのイエズス会本部からザビエルら宣教師にローマ・カトリック再興の希望を託していた。教皇そしてロヨラは伝説の聖杯王のような苦悩の中で、はるか彼方の見果てぬ国から訪れるであろう聖杯騎士「バルツィヴァール」を待ち望んでいたのである。

当時、マルコポーロ(1254-1324)の見聞録によって遙か東に黄金の国「ジパング」があると伝えられた。また、キリスト教世界を救うべく東方からプレスタージョンなど救世の英雄が現れると考えられていた。ザビエルがマラッカで日本人と出会い、ジパングに大きな期待を見出し、最果ての地への渡航を決意したのは伝道活動のみならず、彼をいざなった聖杯騎士伝説、つまり教皇やロヨラを救済する聖杯騎士をジパングに求めていたためではなからうか。

後年、日本での布教活動の成功と、世界で活躍し得る能力を持つ聡明な日本人の若者たちを見て、イエズス会日本宣教団は「日本のバルツィヴァール」たちをローマ教皇に謁見させようとした。これが天正の4人の少年使節であり、彼らもまた日本における騎士階級であり、大名に近い侍の子息であった。先行研究において、この謁見はアジアからのローマの一巡礼者とみなされたとされるが、私は謁見の場において4人がヨーロッパ・キリスト社会に果たした役割は極めて重要であったと考える。それは世界地図の東の最果てに描かれた、ヨーロッパ人が求めてやまない黄金島ジパングから危機的状況にあるローマへ訪れた救世の若き聖杯騎士たちであり、ジパングからの使者(外交使節)であった。これはまた、ローマ教皇庁の地球規模での布教の成功とカトリックの再興が内外に示された時であったといえる(1585年)。

5. 対抗宗教改革と聖杯騎士伝説—キリスト教の新たな時代へ—

以上のように、イエズス会創設者たるロヨラは、カトリック教義にない聖杯騎士伝説を対抗宗教改革の精神としてローマ教皇庁に持ち込んでいた。これは上述の12世紀における神聖ローマ帝国が目指したカトリック刷新の新理念に通じるものである。その理念とは、ロヨラ以下、イエズス会士たちがジパングにおいてそうであったようにキリストの教義を通じ、神の栄光の下、平和と共存を得るという地球規模での異文化交流と、世界宗教としてのキリスト教の新たな時代の到来であった。

<主な海外研究踏査地>

Azpeitia, Pamplona, Javier, Montserrat, Manresa, Barcelona(in Spain)

Paris, Rome, Vatican, Jerusalem

<主要参考文献>

W. V. Bangert, *A History of the Society of Jesus*, 1986